

校異源氏物語・たけ川

これは源氏の御そうにもはなれ給へりしのおほとのわたりにありけるわることたちのおちとまりのこれるかとはすかたりしをきたるはむらさきのゆかりにもにさめれとかの女どものいひけるは源氏の御すゑにひか事ものましりてきこゆるは我よりもとしのかすつもりほけたりける人のひかことにやなどあやしかりけるいつれかはまことならむ内侍のかみの御はらにことのゝ御子はおとこ三人女二人なむおはしけるをさまにかしつきたてむことをおほしをきてゝとし月のすくるも心もとなかりたまひしほとにあえなくうせ給にしかはゆめのやうにていつしかといそきおほしゝ御宮つかへもをこたりぬ人の心時にのみよるわさなりければさはかりいきおひいかめしくおはせしおとゝの御なこりうちゝの御たから物らうし給所ゝのなとそのかたのおとろへはなれれと大かたのありさまひきかへたるやうにとのゝうちしめやかになりゆくかんの君の御ちかきゆかりそこらこそはよにひろこりたまへと中ゝやむことなき御なからひのもとよりもしたしからさりしにことのなさけすこしおくれむらゝしさすき給へりける御本上にて心をかれ給こともありけるゆかりにやたれにもえなつかしくきこえかよひたまはす六条院にはすへてなをむかしにかはらすかすまへきこえ給てうせたまひなむのちのことゝもかきをき給へる御そうふんのふみともにも中宮の御つきにくはへたてまつりたまへれば右大殿などは中ゝその心ありてさるへきおりゝをとつれきこえ給おとこ君たちは御けんふくなとしてをのゝをとなひたまひにしかは殿のおはせてのち心もとなくあはれなることもあれとをのつからなりいて給ひぬへかめりひめ君たちをいかにもてなしたてまつらむとおほしみたる内にもかならすみやつかへのほいふかきよしをおとゝのそうしをき給ければをとなひ給ぬらむとし月をおしはからせ給ておほせことたえずあれと中宮のいよゝならひなくのみなりまさり給御けはひにおされてみな人むとくにものし給ふめるすゑにまいりてはるかにめをそはめられたてまつらむもわつらはしく又人にをとりかすならぬさまにてみむはた心つくしなるへきをおもほしたゆたふれせい院よりはいとねんころにおほしのたまはせてかんの君のむかしほひなくてすくしたまふしつらさをさへとりかへしうらみきこ

え給ふていまはまいてきたすきさましきありさまに思ひすてたまふともうしろやすきおやになすらへてゆつり給へといとまめやかにきこえ給ければいかゝはあるへきことならむみつからのいとくちおしきすくせにて思ひのほか心つきなしとおほされにしかはつかしうかたしけなきをこの世のすゑにや御らんしなをされましなとためかね給かたちいとおはするきこえありて心かけ申給人おほかり右大殿のくら人の少将とかいひしは三条とのゝ御はらにてあに君たちよりもひきこしいみしうかしつき給人からもいとおかしかりし君いとねんころに申給いつかたにつけてもゝてはなれ給はぬ御なからひなれはこの君たちのむつひまいり給なとするはけとをくもてなしたまはす女房にもけちかくなれよりつゝ思事をかたらふにもたよりありてよるひるあたりさらぬみゝかしかましさをうるさきものゝ心くるしきにかむのともおほしたりはゝ北の方の御ふみもしはゝたてまつり給ていとかるひたるほどに侍めれとおほしゆるすかたもやとなむおとゝもきこえ給けるひめ君をはさらにたゝのさまにもおほしをきて給はす中の君をなむいますこし世のきこえかろゝしからぬほどになすらひならはさもやとおほしけるゆるし給はすはぬすみもとつへくむくつけきまておもへりこよなき事とおほさねと女かたの心ゆるし給はぬことのまきれあるはをときゝもあはつけきわさなれはきこえつく人をもあなかしこあやまちひきいつなゝとの給にくたされてなむわつらはしかりける六条の院の御すゑにしゆしやく院の宮の御はらにむまれ給へりし君れせい院に御子のやうにおほしかしつく四位の侍従そのころ十四五はかりにていときひわにおさなかるへきほとよりは心をきておとなくゝしくめやすく人にまさりたるおいさきしるくものし給をかむの君はむこにてもみまほしくおほしたりこの殿はかの三条の宮といとちかきほとなれはさるへきおりゝのあそひ所にはきむたちにひかれてみえ給ときゝあり心にくき女のおはするところなれはわかきおとこの心つかひせぬなうみえしらひさまようなかにかたちのよさはこのたちさらぬ藏人少将なつかしく心はつかしけになまめいたるかたはこの四位侍従の御ありさまにゝる人そなかりける六条の院の御けはひちかうと思なすか心ことなるにやあらむ世のなかにをのつからもてかしつかれ給へる人わかき人ゝ心ことにめてあへりかむの殿もけにこそめやすけれなどのたまひてなつかしう物きこえ給なとす院の御心はへを思ひてきこえてなくさむよなういみしうのみおもほゆるをその御かたみにもたれをかほみたてまつらむ右のおとゝはことゝしき御ほとにてついでなきたいめんもかたきをなどのたまひてはらからのつらにおもひきこえ給へればか

のきみもさるへき所に思ひてまいりたまふよのつねのすきくしきもみえすい
といたうしつまりたるをそこ、かしこのわかき人ともくちおしうさうくしき
事におもひていひなやましけるむ月のついたちころかむの君の御はらからの大
納言たかさこうたひしよ藤中納言故大殿の太らうまきはしらのひとつはらなと
まいり給へり右のおと、も御子とも六人ならひきつれておはしたり御かたち
よりはしめてあかぬ事なくみゆる人の御ありさまおほえなり君たちもさまく
いときよけにてとしのほどよりはつかさくらゐすきつ、なにこと思ふらんとみ
えたるへしよと、もに藏人の君はかしつかれたるさまことなれとうちしめりて
思ふことありかほなりおと、は御木丁へたて、むかしにかはらす御ものかたり
きこえ給そのこと、なくてしはしはもえうけたまはらすとしのかすそふま、に
内にまいるよりほかのありきうゐくしうなりにて侍れはいにしへの御物かた
りもきこえまほしきおりくおほくすくし侍をなむわかきおのこともはさるへ
きことにはめしつかはせ給へかならすその心さし御らむせられよといましめ侍
りなときこえ給いまはかく世にふるかすにもあらぬやうになりゆくありさまを
おほしかすまふるになむすきにし御事もいと、わすれかたく思たまへられける
と申給けるついでに院よりの給はすることほのめかしきこえ給はかくしうう
しろみなき人のましらひは中くみくるしきをとおもひたまへなむわつらふと
申給へは内におほせらる、ことあるやうにうけたまはりしをいつかたにおもほ
しきたむへき事にか院はけに御くらゐをさせ給へるにこそさかりすきたる心
ちすれと世にありかたき御ありさまはふりかたくのみおはしますめるをよろし
うおい、つる女こ侍らましかは思ひたまへよりなからはつかしけなる御中にま
しらふへき物の侍らてなんくちおしうおもひたまへらる、そもく女一の宮の
女御はゆるしきこえ給やさきくの人さやうのは、かりによりと、こほる事も
侍りかしと申たまへは女御なんつれくのとかになりたるありさまもおな
し心にうしろみてなくさめまほしきをなとかのす、め給につけていか、なとた
におもひ給へよるになんときこえ給これかれこ、にあつまり給て三条の宮にま
いり給しゆしやく院のふるき心ものし給人々六条院のかたさまのもかたくに
つけて猶かの入道の宮をはえよきすまいり給なめりこのとの、左近中将右中弁
侍従の君などもやかておと、の御ともにいてたまひぬひきつれ給へるいきをひ
ことなりゆふつけて四位侍従まいり給へりそこらおとなしきわかき人たちもあ
またさまくにいづれかはわろひたりつるみなめやすかりつる中にたちをくれ
てこの君のたちいてたまへるいとこよなくめとまる心ちしてれいの物めてする

わかき人たちはなをことなりけりなといふことの、ひめ君の御かたはらにはこれをこそさしならへてみめとき、にくくいふけにいとわかうなまめかしきさましてうちふるまひ給へるにほひかなとよのつねならすひめ君ときこゆれとおはせむ人はけに人よりはまさるなめりとみしり給らむかしとおほゆるかむの殿御ねんすたうにおはしてこなたにとのたまへれはひんかしのはしよりのほりてとくちのみすのまへにる給へりおまへちかきわかきのむめ心もとなくつほみてうくひすのはつこゑもいとおほとかなるにいとすかせたてまほしきさまのしたまへれは人ゝはかなき事をいふにことすくなに心にukiきほとなるをねたかりて宰相の君ときこゆる上らうのよみかけたまふ

おりてみはいと、匂もまさるやとすこし色めけ梅のはつ花くちはやしとき
ゝて

よそにてはもきゝなりとやさたむらんしたに、ほへる梅のはつ花さらは袖ふれてみ給へなといひすさふにまことは色よりもとくちゝひきもうこかしつへくさまよふかむの君おくのかたよりゑさりいて給てうたてのこたちやはつかしけなるまめ人をさへよくこそおもなけれとしのひてのたまふなりまめ人こそつけられたりけれいとくんしたる名かなと思ふたまへりあるしの侍従てん上などもまたせねは所ゝもありかておはしあひたりせむかうのおしきふたつばかりしてくた物さかつきはかりさしいてたまへりおとゝはねひまさりたまふまゝにこ院にいとようこそおほえたてまつり給へれこの君はに給へる所もみえ給はぬをけはひのいとしめやかになまめひたるもてなしゝもそかの御わかさかり思ひやらるゝかうさまにそおはしけんかしなと思いてられ給てうちしほれ給なこりさへとまりたるかうはしさを人ゝはめてくつかへる侍従の君まめ人の名をうれたしと思ひければ廿五日のころむめの花さかりなるに、ほひすくなけにとりなされしすき物ならはむかしとおほして藤侍従の御もとにおはしたり中門いり給ほとにおなしなをしすかたなる人たてりけりかくれなむと思ひけるをひきとゝめたれはこのつねにたちわつらふ少将なりけりしん殿のにしおもてにひささうのこのこゑするに心をまとはしてたてるなめりくるしけや人のゆるさぬ事思はしめむはつみふかゝるへきわさかなとおもふことのこゑもやみぬれはいさしるへし給へまろはいとたとゝしとてひきつれてにしのわたとのゝまへなるこうはいの木のもとにむめかえをうそふきてたちよるけはいの花よりもしるくさとうちにほへれはつまとおしあけて人ゝあつまをいとよくかきあはせたり女のことにてりよのうたはかうしもあはせぬをいたしとおもひていまひとかへり

おりかへしうたふひはもにないまめかしゆへありてもてなひたまへるあたり
そかしと心とまりぬれはこよひはすこしうちとけてはかなしことなともいふう
ちよりわこんさしいてたりかたみにゆつりて、ふれぬに侍従の君してかむのと
のこちしのおと、の御つまをとになむかよひたまへるとき、わたるをまめやか
にゆかしうなんこよひはなをうくひすにもさそはれたまへのたまひいたした
れはあまへてつめくふへき事にもあらぬをと思ひておさく心にもいらすかき
わたし給へるけしきいとひきおほくきこゆつねにみたてまつりむつひさりし
おやなれと世におはせずなりにきと思ふにいと心ほそきにはかなき事のついて
にもおもひいてたてまつるにいとなんあはれなるおほかたこの君はあやしうこ
大納言の御ありさまにいとようおほえことのねなとた、それとこそおほえつれ
とてなき給もふるめい給しるしのなみたもろさにや少将もこゑいとおもしろう
てさきくさうたふさかしら心つきてうちすくしたる人もましらねはをのつから
かたみにもよをされてあそひたまふにあるしの侍従はこおと、にたてまつり
給へるにやかやうのかたはをくれてさかつきをのみす、むれはことふきをたに
せんやとはつかしめられて竹かはをおなしこゑにいたしてまたわけれとおか
しう、たふすのうちよりかはらけさしいつゑひのすすみてはしのふる事もつ、
まれますひかことするわさどこそき、侍れいかにもてなひ給そとどみにうけひか
すこうちきかさなりたるほそなかの人かなつかしうしみたるをとりあへたるま
ゝにかつけ給なにもそそなとさうときて侍従はあるしの君にうちかつけていぬ
ひきと、めてかつくれとみつむまやにて夜ふけにけりとてにけにけり少将はこ
の源侍従の君のかうほのめきよるめれはみな人これにこそ心よせたまふらめわ
かみはいと、くむしいたく思よはりてあちきなうそうらむる
人はみな花に心をうつすらむひとりそまとふ春の夜のやみうちなきてた
てはうちの人のかへし

おりからやあはれもしらむ梅の花た、かはかりにうつりしもせしあしたに
四位の侍従のもとよりあるしの侍従のもとに夜部はいとみたりかはしかりしを
人ゝいかにみ給けんとみ給へとおほしうかなちにかきて

竹かはのはしうちいてし一ふしにふかき心のそこはしりきやかきたりし
む殿にもてまいりてこれかれみたまふてなともいとおかしうもあるかないかな
る人いまよりかくと、のひたらむおさなくて院にもをくれたてまつりは、宮の
しとけなうおほしたてたまへれと猶人にはまさるへきにこそはあめれとてかん
の君はこの君たちのでたとあしきことをはつかしめ給返事けにいとわかく夜部

はみつむまやをなんとかめきこゆめりし

竹河に夜をふかさしといそきしもいかなるふしをおもひをかましけにこの

ふしをはしめにてこの君の御さうしにおはしてけしきはみよる少将のおしはかりしもしるくみな人心よせたり侍従の君もわかき心にちかきゆかりにてあけくれむつひまほしう思ひけりやよひになりてさくさくらあればちりかひくもりおほかたのさかりなるころのとやかにおはする所はまきるゝことなくはしちかなるつみもあるましかめりそのころ十八九のほとやおはしけむ御かたちも心はへもとりゝにそおかしきひめ君はいとあさやかにけたかういまめかしきさまし給てけにたゝ人にてみたてまつらむはにけなうそみえ給さくらのほそなか山吹などのおりにあひたる色あひのなつかしきほとにかさなりたるすそまであひきやうのこほれおちたるやうにみゆる御もてなしなともらうゝしく心はつかしきけさへそひたまへりいま一所はうすこうはいにさくら色にてやなきのいとやうにたをゝとたゆみいとそひやかになまめかしうすみたるさましておもりに心に心ふかきけはひはまさり給へれとにほひやかなるけはひはこよなしとそ人おもへる五うちたまふとてさしむかひ給へるかむさし御くしのかゝりたるさまともいとみところあり侍従のきみけんそし給とてちかうさふらひ給にあに君たちさしのそき給て侍従のおほえこよなうなりにけり御五のけんそゆるされにけるをやとておとなくゝしきさましてつゐる給へはおまへなる人ゝとかうゐなをる中将宮仕のいそかしうなり侍ほとに人にをとりにたるはいとほいなきわさかなとうれへ給へは弁官はまいてわたくしの宮つかへをこたりぬへきまゝにさのみやおほしすてんなど申給五うちさしてはちらいておはさうするいとおかしけなり内わたりなとまかりありきてもことのおはしまさしかはと思たまへらるゝことおほくこそなと涙くみてみたてまつりたまふ廿七八の程に物し給へはいとよくとゝのひてこの御ありさまともをいかていにしへおほしをきてしたかへすもかなとおもひゐ給へりおまへの花の木もの中にもにほひまさりておかしきさくらをおらせてほかのにはにすこそなともてあそひ給をおさなくおはしましゝ時この花はわかそゝとあらそひ給しをことのはひめ君の御はなそとさため給うへはわか君の御木とさため給しをいときはなきのゝしらねとやすからす思たまへられしはやとてこのさくらの老木になりけるにつけてもすきにけるよはひを思たまへいつれはあまたの人にをくれ侍にける身のうれへともめかたうこそなとなきみわらひみきこえ給てれいよりはのとやかにおはす人のむこになりて心しつかにもいまはみえ給はぬを花に心とゝめてものし給かんの

君かくおとなしき人のおやになり給御としのほと思よりはいとわかうきよけに
猶さかりの御かたちとみえ給へりれせい院のみかとはおほくはこの御ありさま
の猶ゆかしうむかし恋しうおほしいてられければなに、つけてかはとおほしめ
くらしてひめ君の御ことをあなかにきこえ給にそありける院へまいり給はん
ことはこの君たちそなをものゝはへなき心ちこそすへけれよろつのこと時につ
けたるをこそ世人もゆるすめれけにいとみたてまつらまほしき御ありさまはこ
の世にたくひなくおはしますめれとさかりならぬ心ちそするやことふえのしら
へ花とりの色をもねをも時にしたかひてこそ人のみゝもとまる物なれ春宮はい
かゝなど申給へはいさやはしめよりやむことなき人のかたはらもなきやうにて
のみのし給めれはこそ中／＼にてましらはむはむねいたく人わらへなること
もやあらむとつゝましかればとのおはせましかはゆくすゑの御すくせ／＼はし
らすたゝいまはかひあるさまにもてなし給てましをなどのたまひいてゝみなも
のあはれなり中将なとたちたまひてのち君たちはうちさしたまへる五うち給む
かしよりあらそひ給さくらをかけ物にて三はむにかす一かちたまはむかたには
猶花をよせてんとたはふれかはしきこえ給くらうなればゝしちかうてうちはて
たまふみすまきあけて人ゝみないとみねんしきこゆおりしもの少将侍従の
君の御さうしにきたりけるをうちつれていて給にければおほかた人すくなゝる
にらうのとのあきたるにやをらよりてのそきけりかうゝれしきおりをみつけた
るはほとけなどのあらはれたまへらんにまいりあひたらむ心ちするもはかなき
心になんゆふくれのかすみのまきればさやかならねとつく／＼とみればさくら
いろのあやめもそれとみわきつけにちりなむのちのかたみにもみまほしくにほ
ひおほくみえ給をいとゝことさまになり給なんことわひしく思ひまさるわか
き人ゝのうちとけたるすかたともゆふはへおかしうみゆ右かたせ給ぬこまのら
さうをそしやなどはやりかにいふもあり右に心をよせたてまつりてにしのおま
へによりて侍木を左になしてとしころの御あらそひのかゝれはありつるそかし
と右かたは心地よけにはけましきこゆなにことゝしらねとおかしとききてさし
いらへもせまほしけれとうちとけ給へるおり心ちなくやはと思ひていてゝぬぬ
又かゝるまきれもやとかけにそひてそうかゝいありきける君たちはゝなのあら
そひをしつゝあかしくらし給に風あらゝかに吹たるゆふつかたみたれおつるか
いとくちおしうあたらしければまけかたのひめ君

桜ゆへ風に心のさはかなおもひくまなき花とみる／＼御かたの宰相のき
み

さくとみてかつはちりぬる花なれはまくるをふかきうらみともせずときこ
えたすくれは右のひめ君

風にちることはよのつね枝なからうつろふ花をたゝにしもみしこの御かた
の大輔のきみ

心ありて池のみきはおつる花あわとなりても我かたによれかちかたのわ
らはへおりて花のしたにありきてちりたるをいとおほくひろいてもてまいれり
大空の風にちれともさくら花をのか物とそかきつめてみる左のなれき

桜花にほひあまたにちらさしとおほふはかりの袖はありやは心せはけにこ

そみゆめれなといひおとすかくいふに月日はかなくすすもゆくすゑのうしろ
めたきをかんの殿はよろつにおほす院よりは御せうそこ日々にあり女御うとう
としうおほしへたつるにやうへはこゝにきこえうとむるなめりといとにくけに
おほしの給へはたはふれにもくるしうなんおなしくはこのころのほとにおほし
たちねなといとまめやかにきこえ給さるへきにこそはおはすらめいとかうあや
にくにの給もかたしけなしなとおほしたり御てうとなとはそこらしをかせ給へ
れは人々のさうそくなくれのはかなき事をそいそき給これをきくに蔵人の少
将はしぬはかり思ひてはゝきたの方をせめたてまつればきゝわつらひ給ひてい
とかたはらいたき事につけてほのめかしきこゆるもよにかたくなしきやみのま
とひになむおほしゝるかたもあらはおしはかりて猶なくさめさせ給へなといと
おしけにきこえ給をくるしうもあるかなとうちなけきたまひていかなる事と思
たまへさたむへきやうもなきを院よりわりなくの給はするにおもふたまへみた
れてなんまめやかなる御心ならはこの程をおほしゝつめてなくさめきこえんさ
まをもみ給てなん世のきこえもなたらかならむなと申給もこの御まいりすくし
て中の君をとおほすなるへしさしあはせてはうたてしたりかほならむまたくら
ゐなどもあさへたる程をなとおほすにおとこはさらにしか思ひうつるへくもあ
らすほのかにみたてまつりてのちはおもかけに恋しういかならむおりにとのみ
おほゆるにかうたのみかゝらすなりぬるを思ひなけき給事かきりなしかひなき
事もいはむとてれいの侍従のさうしにきたれは源侍従のふみをそみる給へりけ
るひきかくすをさなめりとみてうはひとりつことありかほにやと思ひていたう
もかくさすそこはかとなくたゝ世をうらめしけにかすめたり

つれなくてすくる月日をかそへつゝ物うらめしきくれの春かな人はかうこ
そのとやかにさまよくねたけなめれわかいと人わらはれなる心いられをかたへ
はめなれてあなつりそめられにたるなと思ふもむねいたければことに物もいは

れてれいかたらふ中將のおもとのさうしのかたにゆくもれいのかひあらしかし
となけきかちなり侍従の君はこの返事せむとてうへにまいり給をみるにいとほ
らた、しうやすからすわかき心ちにはひとへに物そおほえけるあさましきまで
うらみなけ、はこのまへ申も余たはふれにく、いとおしと思ひていらへもおさ
おさせすかの御五のけんそせしゆふくれのこともいひいて、さはかりのゆめを
たにまたみてしかなあはれなにをたのみにていきたらむかうきこゆることももの
こりすくなうおほゆれはつらきもあはれといふ事こそまことなりけれといとま
めたちていふあはれといひやるへきかたなきことなりかのなくさめ給らん御さ
ま露はかりうれしとおもふへきけしきもなければけにかの夕くれのけんそうな
りけんにと、かうあやにくなる心はそひたるならんことほりに思ひてきこ
しめさせたらはいと、いかにけしからぬ御心なりけりとうとみきこえたまはむ
心くるしと思きこえつる心もうせぬいとうしろめたき御心なりけりとむかひ火
つくれはいてやさはれやいまはかきりの身なれば物おそろしくもあらすなりに
たりさてもまけたまひしこそいとくおしかりしかをいらかにめしいれてやは
めくはせたてまつらましかはこよなからまし物をなといひて

いてやなそ数ならぬ身にかなはぬは人にまけしの心なりけり中將うちわら
いて

わりなしやつよきによらむかちまけを心ひとつにいか、まかするといらふ
るさへそつらかりける

あはれとて手をゆるせかしいきしにを君にまかする我身とならはなきみわ
らいみかたらいあかす又の日はう月になりにければ、らからの君たちのうちに
まいりさまよふにいたうくんしいりてなかめゐたまへれば、北のかたはなみ
たくみておはすおと、も院のきこしめす所もあるへしなに、かはおほなく、き
ゝいれむと思ひてくやしうたいめんのついてにもうちいてきこえすなりにし身
つからあなかに申さましかはさりとめえたかへ給はさらましなどのたまふさ
てれいの

花をみて春はくらしつけふよりやしけきなけきのしたにまとはむときこえ
たまへりおまへにてこれかれ上らうたつ人ゝこの御けさうひとのさまく、にい
とおしけなるをきこえしらするなかに中將のおもといきしにをといひしさまの
ことにのみはあらす心くるしけなりしなときこゆれはかむの君もいとおしとき
ゝ給おと、北の方のおほす所によりせめて人の御うらみふかくはと、りかへあ
りておほすこの御まいりをさまたけやうに思ふらんはしもめさましきことかき

りなきにてもたゝ人にはかけてあるましき物にことのゝおほしをきてたりし物を院にまいり給はむたにゆくすゑのはへくしからぬをおほしたるおりしもこの御ふみとりいれてあはれかる御返事

けふそしる空をなかむる気色にて花に心をうつしけりともあないとおした

はふれにのみもとりなすかなゝといへとうるさかりてかきかへす九日にそまいり給右の大殿御くるま御せんの人ゝあまたゝてまつり給へり北のかたもうらめしと思きこえたまへとゝしころさもあらさりしにこの御ことゆへしけうきこえかよひたまへるを又かきたえんもうたてあれはかつけ物ともよき女のさうそくともあまたたてまつれ給へりあやしううつし心もなきやうなる人のありさまをみ給へあつかふほとにうけたまはりとゝむる事もなかりけるをおとろかさせ給はぬもうとくしくなんとそありけるをひらかなるやうにてほのめかし給へるをいとおしとみ給おとゝも御ふみあり身つからまいるへきに思たまへつるにつゝしむ事の侍てなんおの子ともさうやくにとてまいらすうとからすめしつかはせ給へとて源少将兵衛佐などたてまつれ給へりなさははおはすかしとよろこひきこえ給大納言とのよりも人々の御くるまたてまつれ給北のかたは古おとゝの御むすめまきはしらのひめ君なれはいつかたにつけてもむつまじうきこえかよひ給へけれとさしもあらず藤中納言はしも身つからおはして中将弁のきみたちもろともにことをこなひ給殿のをはせましかはとよろつにつけてあはれなり蔵人のきみれいの人にいみしきことはをつくしていまはかきりと思はへるいのちのさすかにかなしきをあはれと思とはかりたに一ことのたまはせはそれにかけとゝめられてしはしもなからへやせんなどあるをもてまいりてみればひめ君ふたところうちかたらひていいたうくんしたまへりよるひろもろともにならひ給て中の戸はかりへたてたるにしひんかしをたにいといふせきものにし給てかたみにわたりかよひおはするをよそくにならむ事をおほすなりけり心ことにしたてひきつくろひたてまつり給へる御さまいとおかし殿のおほしの給しさまなどをおほしいてゝ物あはれなるおりからにやとりてみたまふおとゝ北のかたのさはかりたちならひたのもしけなる御中になとかうすゝろことを思いふらんとあやしきにもかきりとあるをまことやおほしてやかてこの御ふみのはしに

あはれてふつねならぬ世のひとこともいかなる人にかくる物そはゆゝしき

かたにてなんほのかに思しりたるとかきたまひてかういひやれかしとの給をやかてたてまつれたるをかきりなうめつらしきにもおりおほしとむるさへいとゝ

なみたもとゝまらすたちかへりたかなはたゝしなとかことかましくて

いける世のしには心にまかせねはきかてやゝまむ君かひとことつかのうへ

にもかけ給へき御心のほと思ひ給へましかはひたみちにもいそかれ侍らましを
などあるにうたてもいらへをしてけるかなかきかへてやりつらむよとくるしけ
におほして物もの給はすなりぬおとなわらはめやすきかきりとゝのへられた
りおほかたのきしきなどは内にまいり給はましにかはることなしまつ女御の御
かたにわたり給てかんの君は御物語なときこえ給夜ふけてなんうへにまうのほ
り給けるきさき女御などみなとしころへてねひ給へるにいとつくしけにてさ
かりにみところあるさまをみたてまつりたまふはなとてかはおろかならむはな
やかにときめき給たゝ人たちて心やすくもてなし給へるさましもそけにあらま
ほしうめてたかりけるかんの君をしはしさふらひ給なんと御心とゝめておほし
けるにいとゝくやをらいて給にければくちをしう心うしとおほしたり源侍従の
君をはあけくれおまへにめしまつはしつゝけにたゝむかしのひかる源氏のおい
ゝて給しにをとらぬ人の御おほへなり院のうちにはいつれの御かたにもうとか
らすなれましらひありき給ふこの御かたにも心よせありかほにもてなしてした
にはいかにみたまふらむの心さへそひ給へりゆふくれのしめやかなるに藤侍従
とつてありくにかの御かたの御前ちかくみやらるゝ五葉に藤のいとおもしろ
くさきかゝりたるを水のほとりの石にこけをむしろにてなかめ給へりまほに
はあらねと世の中うらめしけにかすめつゝかたらふ

手にかくる物にしあらは藤の花まつよりまさる色をみましやとて花をみあ

けたるけしきなどあやしくあはれに心くるしくおもほゆれは我心にあらぬ世の
ありさまにほのめかす

むらさきの色はかよへと藤の花心にえこそかゝらさりけれまめなる君にて

いとおしと思へりいと心まとふはかりは思ひいられさりしかとくちおしうはお
ほえけりかの少将の君はしもまめやかにいかにせましとあやまちもしつへくし
つめかたくなおほえけるきこえ給し人々中の君をとうつろふもあり少将の君
をははゝきたのかたの御うらみによりさもやとおもほしてほのめかしきこえ給
しをたえてをとつれすなりにたり院にはかの君たちもしたしくもとよりさふら
ひたまへとこのまいり給てのちおさゝまいらすまれゝ殿上のかたにさしの
そきてもあちきなうにけてなんまかてける内には古おとゝの心さしをき給へる
さまことなりしをかくひきたかへたる御宮つかへをいかなるにかとおほして中
将をめしてなんの給はせける御気色よろしからすされはこそ世人の心のうちも

かたふぎぬへき事なりとかねて申し事をおほしとるかたことにてかうおほしたちにしかはともかくもきこえかたくて侍にかゝるおほせ事の侍れはなにかしらか身のためもあちきなくなん侍といどものしと思ひてかんの君を申給いさやたゝいまかうにはかにしも思たゝさりしをあなかにいとおしうの給はせしかはうしろみなきましらひのうちわたりははしたなけなめるをいまは心やすき御ありさまなめるにまかせきこえてと思よりしなりたれもくひなからむ事はありのまゝにもいさめたまはていまひきかへし右のおとゝもひかくしきやうにおもむけてのたまふなれはくるしうなんこれもさるへきにこそはとなたらかにの給て心もさはい給はすそのむかしの御すくせはめにみえぬものなれはかうおほしの給はするをこれは契ことなるともいかゝはそうしなをすへきことならむ中宮をはゝかりきこえ給とて院の女御をはいかゝしたてまつり給はむとするうしろみやなにやとかねておほしかはすともさしもえ侍らしよしみきゝ侍らんようおもへは内は中宮おはしますとてこと人はましらひ給はすや君につかふまつる事はそれか心やすきこそむかしよりけうあることにはしけれ女御はいさゝかなることのたかひめありてよろしからす思きこえたまはむにひかみたるやうになん世のきゝみゝも侍らんなどふた所して申給へはかんの君いとくるしとおほしてさるはかきりなき御思のみ月日にそへてまざる七月よりはらみ給にけりうちなやみたまへるさまけに人のさまくきにきこえわつらはすもことはりそかしいかてかはかゝらむ人をなのめにみきゝすくしてはやまんとそおほゆるあけくれ御あそひをせさせ給つゝ侍従もけちかうめしいるれは御ことのねなとはきゝたまふかの梅か枝にあはせたりし中将のおもとのわこんもつねにめしいてゝひかせ給へは聞あはするにもたゝにはおほえさりけりそのとしかへりておとこたうかせられけり殿上のわか人ともの中にもゝ上手おほかるころをひなりその中にもすぐれたるをえらせ給てこの四位侍従右のかとうなりかの蔵人の少将かく人のかすのうちにありけり十四日の月のはなやかにくもりなきに御前よりいてゝれせい院にまいる女御もこのみやすところもうへに御つほねしてみ給ふかんなたちめみこたちひきつれてまいりたまふ右の大殿ちしの大殿のそうをはなれてきらくしうきよける人はなきよなりとみゆうちのおまへよりもこの院をはいとはつかしうことに思ひきこえてみな人よういをくはふる中にもくらひとの少将はみたまふらんかしと思ひやりてしつ心なしにほひもなくみくるしきわた花もかさす人からにみわかれてさまもこゑもいとおかしそありける竹かはうたひて御はしのもとにふみよるほとすきにしよのはかなりしあそひも思ひ

いてられければひか事もしつへくて涙くみけりきさいの宮の御かたにまいれは
うへもそなたにわたらせ給て御らんす月は夜ふかくなるまゝにひるよりもはし
たなうすみのほりていかにみたまふらんとのみおほゆれはふむそらもなうたゝ
よひありきてさかつきもさしてひとりをのみとかめらるゝはめいほくなくなん
夜一よところ／＼かきありきていとなやましうくるしくてふしたるに源侍従を
院よりめしたれはあなくなるししはしやすむへきにとむつかりなからまいり給へ
り御前のことゝもなとはせ給かとうはうちすくしたる人のさき／＼するわさ
をえらはれたるほと心にくかりけりとてうつくしとおほしためり万春樂を御く
ちすさみにし給つゝ宮す所の御かたにわたらせ給へは御ともにまいり給物みに
まいりたるさと人おほくてれいよりはゝなやかにけはひいまめかしわたとのゝ
とくちにしはしめてゑきゝしりたる人に物なとのたまふ一夜の月かけははし
たなかりしわさかな藏人の少将の月の光にかゝやきたりしけしきもかつらのか
けにはつるにはあらずやありけん雲のうへちかくてはさしもみえさりきなとか
たり給へは人ゝあはれときくもありやみはあやなきを月はえはいますこし心こ
となりとさためきこえしなとすかしてうちより

竹かはのその夜のことは思いつやしのふはかりのふしはなけれといふは
かなきことなれと涙くまるゝもけにいとあさくはおほえぬことなりけりと身つ
から思しらる

なかれてのたのめむなしき竹かはに世はうきものとおもひしりにき物あは
れなるけしきを人ゝおかしかるさるはおりたちて人のやうにもわひ給はさりし
かと人さまのさすかに心くるしうみゆるなりうちいてすくす事もこそ侍れあな
かしことてたつほとにこなたにとめしいつれはゝしたなき心ちすれとまいり給
ふこ六条院のたうかのあしたに女かくにてあそひせられけるいとおもしろかり
きと右のおとゝのかたられしなにこともかのわたりのさしつきなるへきひとか
たくなりけるよなりやいとものゝ上する女さへおほくあつまりていかに
かなきこともおかしかりけんなどおほしやりて御ことゝもしらへさせ給てさう
は宮す所ひはゝしゝうにたまふわこんをひかせ給てこの殿などあそひ給宮す所
の御ことのねまたかたなりなるところありしをいとうようをしへないたてまつり
給てけりいまめかしうつまをとよくてうたこくの物など上すにいとよくひき給
なにことも心もとなくをくれたることはものしたまはぬ人なめりかたちはたい
とおかしかへしと猶心とまるかやうなるおりおほかれとをのつからけとをから
すみたれ給かたなくね／＼しうなとはうらみかけねとおりに／＼につけて思ふ

心のたかへるなけかしさをかすむるもいか、おほしけんしらすかしう月に女宮
むまれ給ぬことにけさやかなるもの、はへもなきやうなれと院の御気色にした
かひて右の大殿よりはしめておほんうふやしなひし給所、おほかりかんの君
つといたきもちてうつくしみ給にとうまいり給へきよしのみあれはいかの程に
まいり給ぬ女一宮一所おはしますにいとめつらしくうつくしうておはすれはい
といみしうおほしたりいと、たゝこなたにのみおはします女御かたの人ゝいと
かゝらてありぬへき世かなとたゝならすいひ思へりさうしみの御心ともはこと
にかるゝしくそむき給にはあらねとさふらふ人々の中にくせゝしきことも
いてきなとしつゝかの中將の君のさいへと人のこのかみにてのたまひし事かな
ひてかんの君もむけにかくいひゝのはていかならむ人わらへにはしたなうも
やもてなされむうへの御心はへはあさからねとゝしへてさふらひ給御かたゝ
よろしからす思ひはなち給はゝくるしくもあるへきかなとおもほすに内にはま
ことに物しとおほしつゝたひゝ御けしきありと人のつけきこゆればわつらは
しくて中の姫君をおほやけさまにてましらはせてまつらむことをおほして内
侍のかみをゆつり給おほやけいとかたうし給ことなりければとしころかうおほ
しをきてしかとえしゝ給はさりしを故おとゝの御心をおほして久しうなりにけ
るむかしのれいなとひきいてゝそのことかなひ給ぬこの君の御すくせにてとし
ころ申給しはかたきなりけりとみえたりかくて心やすくて内すみもし給へかし
とおほすにもいとおしう少將の事をはゝ北のかたのわさとのたまひし物をたの
めきこえしやうにほめかしきこえしもいかに思ひたまふらんとおほしあつか
ふ弁の君して心うつくしきやうにおとゝにきこえ給うちよりかゝる仰ことのあ
れはさまゝにあなかななるましらひのこのみと世のきゝみゝもいかゝと思給
へてなんわつらひぬるときこえ給へはうちの御気色はおほしとかむるもことは
りになんうけたまはるおほやけことにつけても宮つかへし給はぬはさるましき
わさになんはやおほしたつへきになんと申給へり又このたひは中宮の御気色と
りてそまいり給ふおとゝおはせましかはおしけち給はさるましなとあはれなる
ことゝもをなんあね君はかたちなど名たかうおかしけなりときこしめしをきた
りけるをひきかへ給へるをなま心ゆかぬやうなれとこれもいとらうゝしく心
にくゝもてなしてさふらひ給さきのかんの君かたちをかへんとおほしたつを
かたゝにあつかひきこえ給ふほとにをこなひも心あはたゝしうこそおほされ
めいますこしいつかたも心のとかにみたてまつりなし給てもとかしき所なくひ
たまちにつとめ給へと君たちの申給へはおほしとゝこほりて内には時ゝしのひ

てまいり給おりもあり院にはわつらはしき御心はへのなをたえねはさるへきおりもさらにまいり給はすいにしへをおもひいてしかさすかにかたしけなうおほえしかしこまりに人のみなゆるさぬことにおもへりしをもしらすかほに思ひてまいらせたてまつりてみつかからさへたはふれにてもわか／＼しき事の世にきこえたらむこそいとまはゆくみくるしかるへけれとおほせとさるつみによりとはた宮す所にもあかしきこえ給はねは我をむかしより故おとゝはとりわきておほしかしつきかんの君はわかきみをさくらのあらそひはかなきおりにも心よせ給しなこりにおほしおとしけるよとうらめしう思きこえ給けり院のうへはたましでいみしうつらしとおほしのたまはせけるふるめかしきあたりにさしはなちて思おとさるゝもことはり也とうちかたらひ給てあはれにのみおほしまさるとしころありて又おとこみこうみ給つそこらさふらひ給御方／＼にかゝる事なくてとしころになりけるをゝろかならさりける御すくせなとよ人おとろくみかとはましてかきりなくめつらしとこのいま宮をは思きこえ給へりおりい給はぬ世ならましかはいかにかひあらましいまはなに事もはへなき世をいとくちおしとなんおほしける女一宮をかきりなき物におもひきこえ給しをかくさま／＼にうつくしくてかすそひ給へれはめつらかなるかたにていとおほいたるをなん女御もあまりかうては物しからむと御心うきけることにふれてやすからすくね／＼しきこといできなとしてをのつから御中もへたゝるへかめり世のこととして数ならぬ人のなからひにももとよりことはりえたる方にこそあひなきおほよその人も心をよするわさなめれは院の内の上下の人ゝいとやむことなくて久しくなり給へる御方にのみことはりてはかないことにもこの方さまをよからすとりなしなとするを御せうとの君たちもされはよあしうやはきこえをきけるといゝ申給心やすからすきゝくるしきまゝにかゝらてのとやかにめやすくて世をすくす人もおほかめりかしききなきさいはひなくて宮つかへのすちは思ひよるまじきわさなりけりとおほうへはなけき給きこえし人ゝのめやすくなりのほりつゝさてもおはせましにかたわならぬそあまたあるやその中に源侍従とていとわかうひわつなりとみしは宰相中将にてにほふやかほるやときゝにくゝめてさはかるなるけにいと人からおもりに心にくきをやんことなきみこたち大臣の御むすめを心さしありてのたまふなるなともきゝいれすなどあるにつけてそのかみはわかう心もとなきやうなりしかとめやすくねひまさりぬへかめりなといひおはさうす少将なりしも三位中将とかいひておほえありかたちさへあらまほしかりきやなとなま心わろきつかうまつり人はうち忍ひつゝうるさけ

なる御有さまよりはなといふもありていとおしうそみえし此中將は猶思そめし
心たえすうくもつらくも思ひつゝ左大臣の御むすめをえたれとおさく心もと
めすみちのはてなるひたち帯のとてならひにもことくさにもするはいかにおも
ふやうのあるにか有けん宮す所やすけなきよのむつかしさにさとかちになり給
ひにけりかんの君思ひしやうにはあらぬ御有さまをくちおしとおほすうちの君
は中くいまめかしう心やすけにもてなしてよにもゆへあり心にくきおほえに
てさふらひ給左大臣うせ給て右は左にとう大納言左大将かけ給へる右大臣にな
り給つきくの人となりあかりてこのかほる中將は中納言に三位の君は宰相にな
りて悦したまへる人々この御そうより外に人なきころをひになんありける中
納言の御悦にさきのないしのかんの君にまいり給へりおまへの庭にてはいした
てまつり給かんの君たいめんし給てかくいと草ふかなりゆくむくらの門をよ
き給はぬ御心はえにも先昔の御こと思出られてなんなどときこえ給御こゑあてに
あいきやうつききかまほしういまめきたりふりかたくもおほするかなかれは
院のうへは恨給御心たえぬそかし今つゐにことひきいて給てんと思悦などは心
にはいとしも思給へねとも先御らむせられにこそまいり侍れよきぬなどの給は
するはをろかなるつみにうちかへさせ給にやと申給けふはさたすきにたる身の
うれへなときこゆへきつてにもあらずとつゝみ侍れとわさと立より給はん事
はかたきをたいめんなくてはたさすかにくたくしきことになん院にさふらは
るゝかいといったう世の中を思みたれなか空なるやうにたゝよふを女御をたのみ
きこえ又きさいの宮の御方にもさりともおほしゆるされなんと思ひ給へすくす
にいつかたにもなめけに心ゆかぬ物におほされたなれはいとかたはらいたくて
宮たちはさてさふらひ給このいとましらひにくける身つからはかくて心やす
くたになかめすくい給へとてまかてさせたるをそれにつけてもきゝにくゝなん
うへにもよろしからすおほしの給はすなるついてあらはほめかしそうし給へ
とさまかうさまにたのもしく思ひ給へていたしたて侍りしほとはいつかたをも
心やすくうちとけたのみきこえしかといまはかゝることあやまりにおさなうお
ほけなかりける身つからの心をもとかしくなんとうちない給けしき也さらにか
うまておほすましきことになんかゝる御ましらひのやすからぬことはむかしよ
りさることゝなり侍にけるをくらいをさりてしつかにおはしまし何事もけさや
かならぬ御ありさまとなりたるにたれもうちとけ給へるやうなれとをのく
うちくはいかゝいとましくもおほすこともなからむ人はなにのとかとみぬこ
ともわか御身にとりてはうらめしくなんあいなきことに心うこかひ給こと女御

後のつねの御くせなるへしはかりのまきれもあらし物とてやおほしたちけ
んたゝなたらかにもてなして御らんしすくすへきことに侍也おのこのかたにて
そうすへき事にも侍らぬ事になんといとすくくしう申給へはたいめんのつい
てにうれへきこえむとまちつけたてまつりたるかひなくあわの御ことはりやと
うちわらひておはする人のおやにてはかくしかり給へるほどよりはいとわか
やかにおほといたる心ちす宮す所もかやうにそおはすへかめるうちのひめ君の
心とまりておほゆるもかうさまなるけはひのおかしきそかしと思ふ給へり内侍
のかみもこのころまかて給へりこなたかなたすみ給へるけはひおかしうおほか
たのとやかにまきるゝ事なき御ありさまとものすのうち心はつかしうおほゆれ
は心つかひせられていとゝもてしつめゝやすきを大うへはちかうもみましかは
とうちおほしけり大臣殿はたゝこのとのゝひんかしなりけりたひきやうのゑか
のきんたちなどあまたつとひ給兵部卿の宮左の大臣とのゝのりゆみのかへりた
ちすまゐのあるしなどにはおはしまししを思ひてけふのひかりとさうしたてま
つり給けれとおはしまさす心にくゝもてかしつきたまふひめ君たちをさるは心
さしことにいかてと思ひきこえ給へかめれと宮そいかなるにかあらん御心もと
め給はさりける源中納言のいとゝあらまほしうねひとゝのひ何事もをくれたる
かたなくものし給をおとゝも北のかたもめとゝめ給けりとなりのかくのゝしり
てゆきちかふ車のをとさきをふこゑくもむかしのこと思いてられてこの殿に
は物あはれになかめ給故宮うせ給て程もなくこのおとゝのかよひ給しほどをい
とあはつけいやうによ人はもとくなりしかとかくてもものし給もさすかなるかた
にめやすかりけりさためなのやいづれにかよるへきなどのたまふ左の大殿の
宰相中将たいきやうの又の日夕つけてこゝにまいり給へり宮すところさとお
はすとおもふにいとゝ心けそうそひておほやけのかすまへたまふよろこひなど
はなにともおほえ侍らすわたくしの思ふ事かなはぬなけきのみ年月にそえて思
給へはるけんかたなき事と涙をしのこふもことさらめいたり廿七八のほとん
とさかりににほひはなやかなるかたちし給へりみくるしの君たちの世中を心の
まゝにおこりてつかさくくらいをはなにとと思はすゝくしいますからうや故との
おはせましかはこゝなる人ゝもかゝるすさひ事にそ心はみたらましとうちなき
給右兵衛督右大弁にてみな非参議なるをうれはしと思へり侍従ときこゆめりし
そこのころ頭の中將ときこゆめるとしよはひのほとはかたわならねと人にをく
るとなけき給へり宰相はとかくつきつきしく